資料２

木造阿弥陀如来立像

＜概要＞

員　　数　　１軀

法　　量　　像高 78.3cm

時　　代　　鎌倉時代（13 世紀）

本像は、大御堂寺客殿の左脇壇に安置される客仏[1]である。寺伝では、長島一向一揆に際して、篠橋城の戦いの折に路傍に据置かれていた像を、水野忠守[2]が拾い得て尊崇し、尾張緒川の居城に祀り、後代に大御堂寺に安置したとされる。

本像の丸みの強い頭部、やや甘やかな面相は、比較的晩年に近い快慶の作風であり、耳の彫法も共通している。但し、体部に関しては、背面右脇の覆肩衣[3]と衲衣[4]の重なりが浅く上下関係がやや曖昧であること、裙部衣文の単調さなど、他の快慶作に比してやや厳かで美しい迫力を減じている。快慶の指導下、きわめて近い仏師による制作も考えられ、制作期日の短縮から頭・体部分業制作の可能性も考慮され、快慶在世時代の工房内で制作された可能性は高い。

本像は快慶工房における弟子たちの活動範囲等を考える上で重要な作例であり、県下における安阿弥様[5]の 13 世紀における優作の中でも、その資料的価値は極めて高いと言えるであろう。

---

1 本来その寺のものではなかったものが途中から持ち込まれた仏像。

2 1525 -1600 年。戦国時代から安土桃山時代にかけての武将。水野忠政の三男または四男。

3 僧の衣の１つ。袈裟の下に着る腋をおおう長方形の衣。袈裟が汗などでよごれるのを防ぐ。肩にかけ、両端で左右の腋や胸・乳をおおって着る。

4 人が捨てたぼろを縫って作った袈裟のこと。古くは、これを着ることを修行の１つとしたが、中国に至って華美となり、日本では綾・錦・金襴などを用いた袈裟をいう。

5 鎌倉時代の仏師快慶の作風に影響を受けた仏像の様式。快慶の法号である安阿弥陀仏にちなんで称した呼称。

木造阿弥陀如来立像（愛知県提供）